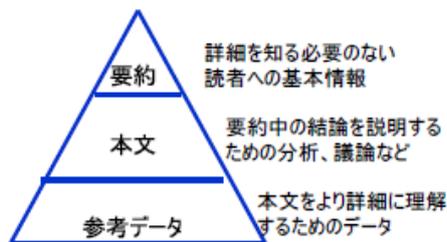


ミシガン大学で “From General to Particular” という原則を学ぶ

1981年夏に日本工業英語協会主催のミシガン大学でのテクニカルライティング研修に参加した。授業でドワイト・スティーブ教授、J.C.マーセス教授は私たち日本人受講者にも、わかるように、ゆっくりと、“From General to Particular” というフレーズを何度も繰り返した。彼らはビジネス社会におけるコミュニケーションにおける、「総論から各論へ」「要点を述べ、そして本論へ」という原則の重要性を特に強調した。

そして、初日の講義の中ではじめてテクニカル文書のエッセンスとも言うべき下のピラミッドについて学んだ。テクニカル文書は次の3つの部分によって構成される。第一に要約を書く。第二に本文、すなわち議論または分析の内容を記述する。第三は参考データであり、本文を深く理解するために、さらに詳細な説明を提供する。読み手は各自の必要に応じて、これら3つの部分を選択していく。要約だけを読む人もいれば、要約、本分ともに読む人もいる。さらに興味を持った人は最後の参考データまで読み込むことになる。



私がイーライリリーに在職中、ニュージーランド人の社長が、任期を終え、アメリカ本社に帰国するとき送別の夕食会の席で、「あなたの在任中に、日本人社員と仕事を進めえるにあたり、最も困難を感じたのはどんなときだったでしょうか？」との私の質問に、彼は次のように答えた。「数多くの日本人のコミュニケーションの方法が、私にはわかりにくかった。」「ある課長が私の部屋にやってきて、制度の変更について説明をはじめた。細かいデータを示していろいろ説明をはじめますが、この課長が、社長の私に、何をしてほしいのかが、なかなか理解できない。」「さらに、話がどこへ進もうとしているのかも、最初の間、見えなかった。」社長は、このような、事例は在任中、枚挙に、暇が無いほど経験したと、述べた。このことから、“From General to Particular”は作文だけでなく、口頭も含めたグローバルコミュニケーションに適用される原則であることがわかる。

起承転結とはまったく異なった文章構成法

ミシガン大学のこの両教授はこの考え方を確立し、アメリカビジ

ネス界において広めるのに大きな役割を果たされてきた。日本にも、頻りに訪問され、大学や企業向けに数多くの講義を20年以上にわたり実践されてきた。この最初の講義で私が受けた衝撃は大変なものであった。今まで日本での文章構成法として親しんできた「起承転結」とはまったく異なった新しい構成法であった。

2003年春、マーセス教授が訪日されたとき、神戸をドライブしながらこのピラミッド構成について質問してみた。そして確認できたことは、この文章のピラミッド構成の考え方は昔からあったものではなく、彼らミシガン大学のグループのアイデアであり、彼らがアメリカにおいて数十年の歳月をかけて全米で定着させてきたということである。このアイデアが定着するまでは、物事を帰納的に、順序だてて説明するという日本人が馴染んできた方法が圧倒的であったという。すなわち逆ピラミッドの順序である。彼らの功績はまさに、天と地を逆転させたことなのである。

今日、組織で働く人々は、毎日他部門からあるいは顧客から送られてくる、溢れんばかりのメールや文書に辟易している。読み手はできることなら、送られてくる文書を読まずに済ませたいと思っている。だからと長く、最後まで読まないで結論が分からない文書には困っている。この現状を理解できれば、「要点を述べ、そして本論へ」という原則の重要性が分かるはずだ。

グローバル人材はこの原則を知っておくべき

現在グローバル人材の育成が声高に叫ばれるが、「要点を述べ、そして本論へ」は西欧社会と効果的にコミュニケーションする上で必須の原則といえるが、このことを学ぶ機会は日本において、小学校から大学にいたるまで、ほとんどないのが現実だ。

研究論文を書く人々の世界では、論文の最初の章で、アブストラクト[要約]を書くことは日本でも誰もが理解している。そこには、研究の目的や結果が簡潔にまとめられる。これは「要点を述べ、そして本論へ」という原則に即した記述法である。しかし、大学で論文指導する先生方は、研究論文の書き方についてのみ指導するだけであって、この原則は学生が社会に出た後において、国際社会におけるコミュニケーションの原則として重要であることについて、十分、学生に説明しきれていない。

編 | 集 | 後 | 記

起承転結を否定しているわけではありません。文学の世界と、自分の意思を効果的に相手に伝える必要があるビジネスの世界とは異なったルールを使うべきであることを理解していただきたいのです。書店には文章術、レポート・論文の書き方についての参考書が並んでいますが、今回述べた原則を踏まえたものはまだ少数派です。

野尻